

供の影響は間接的なものになると言えるのではないか。門外漢の突飛な類推でしかないが、数学の世界から「実数」だけ残して、「虚数」を追放していたら、現代文化は成り立たなかったのではないだろうか。「虚」のもつ重要性を強調したい所以である。

一般教育には全学の学生に対して受講の義務を負わせる「開放性」と「拘束性」がある。しかもほとんどの受講生が年令的には十代終わりから二十代初めに集中しているという特殊性がある。従って、ある意味では大学の一般教育は常にこの年代の受講生にとって「分り易く、面白く、役に立つ」学問であることをとりわけ要求されているのだといえなくはない。しかし「分り易く、面白く、役に立つ」学問というのは正に至難の業であるに違いないし、そのためにも払われた時間と労力に比較すると、至極平凡で常識的な内容になるのではあるまいか。その理由は一般教育には本来、日常的な人間・社会・自然を原点とする「人文主義」的な側面があるからではないだろうか。前

人未踏の分野における発明・発見・独創といった研究成果に比較すると、地味で評価しにくい所があるからではなからうか。一般教育の研究教育の成果というものは、「非凡なる平凡」とでもいうべき性質のものではないだろうか。それ故、ともすれば「一般教育は専門教育より程度の低いもの」という錯覚と誤解を招きやすいのではなからうか。しかし、一般教育にはもともと人間性、社会性、指導性といった高度の文化的諸側面が内包されているとあってよいはずのものであり、それが大学教官が社会的には「知識人」「文化人」と称される所以なのではあるまいか。

本来、大学教官はその国の文化創造の一翼を担うべき存在であり、とりわけ一般教育担当教官は大学の「華」というべき存在である。大学を発信基地とする文化を「大学文化」とすれば、一般教育は大学文化のいわば「精華」と称されて然るべきはずのものではないのだろうか。

「制度」としての語学教育

渡 邊 英 夫

今年も新しい学年が始まろうとしている。空は晴れわたり、陽射しはすでに暖かい。例年になく早い桜前線の到来に、春は爛漫。しかし私の心は暗く重い。もうすぐ新入生がやってくる。

自己を深く見つめ、自らの可能性や限界を知り、社会的な存在としての自己確立を志向することのできる最後のモラトリアム

期を過ごす場が「大学」のほずであった。こういう時代だから向学心こそ期待されないとしても、とらわれないナイーブさ、選択の柔軟さ、計算のない今への投機性、こういったものが新しく大学に入ってくる「若者」のほずであった。しかし、毎年迎える新入生たちの実像はこれとはかなり違っている。入試をスケープ・ゴートにし

て、制度と理念の適合性を知らず知らずのうちで失って、教育の目標が制度の維持を目指し、制度を定立させる理念を問わない「作業」に擦り替えてきた現行の学校教育の落とし子達は、もはや作業としての学習の効率と効果にしか関心を示そうとしない。これらの学生達が一般教育科目で選択するのは決まって単位が楽にとれそうな既習の“高校の内容となんら変わらない”科目である。目新しきもの、独りで選択しなければならないような科目はそれこそ彼等の「存在の不安」をかき立てるらしい。個性や独自性の発揮は極力慎まなければならない。単位が出ると思われる科目ならいざ知らず、そうでないものは内容の把握できる、リスクの少ないものに限る。

しかし、必修で、文字どおりの「初修」外国語だけはそうもいかない。でも、学生達は自ら制度への適応を強要され続けてきた制度の優等生であることをここでも露顕する。横文字を嫌う多くの学生は中国語を、そして昔から大学生の修得すべきはドイツ語で、ちょっと軟弱で小粋なフランス語はきっと易しいはずだと思うらしい。学生達はそれぞれが多数派になってやっと安心する。

「制度」への適応は学生側ばかりにあるのではない。初めて学ぼうとする学科に学生達は期待と不安を抱いて出席する。しかし彼等の期待はすぐに失われ、不安は早急に、そして確実に解消する。初めての語学の教室は決まって席が足りない。60名以上もあるだろうか。授業は100分。週1回ずつの文法と講読。夏休みや冬休みが高校よりはるかに長いことを思うと年間の授業回数はあまりに少ない。しかし、教師が出席の必要や、単位制度、当該外国語の重要性を話

すと、もう第1回の授業は終わる。1週間後に再開されたクラスは「演習」ではなく、モノトーンなことばの解説という「講義」の始まり。わずかに用意された外人教師のクラスや、会話やヒアリングの授業も週1回の多人数クラスとなればその効果も期待する方が無理だ。

語学教育の目的がいろいろと論議されて久しい。「実用」か「教養」か。はたまた高度の規律や忍耐力、あるいはシステムティックな機能力の涵養を育む「技巧形成機能」の開発ともいわれてきた。国際化の時代では「異文化理解」も語学教育の重要な目的となろう。しかし、何よりも制度の合目的性が第一の語学教育の最大の目標は制度そのものの維持とその強化であることは言を待たない。学生、教師の相方にとって、それは入試、単位修得（進級・卒業）、そして、就職のためのものであり、とりわけ教師にとっては仕事であり、したがって、生活のためであり、学校（カリキュラム）制度こそは、それらを将来にわたり安全により確実にする。

いずれの立場からも学習者の個性は問題とされず、その能力育成よりも、カリキュラムの遂行が、中味が問われないままの密室の中の、互いに求めることのない共犯関係の中でとり行われる。授業は中味の濃さよりもおもしろさで受け、休講ほど楽しいものもない。もともとは生きた、実践されるべきことばの学習が、あたかも古文書を扱うように、多くは変わらぬままの伝統的な方法で「体制」文化として教えられ続けている。母国語との差異を強調する意識や直訳のことばを残す段階的な解釈法。時間を浪費しても使いこなせないことからくる無力感を正当化する、学習そのものが社会

的ステイタスとなるその「象徴機能」。語学教育の体制化は揺るぎない。

しかし、最近この教育者と学習者の相方の制度への過度の固執が生み出した語学教育の閉塞状態が、この制度に周期的に入れかわる若くナイーブな学習者側からすこしずつ開かれ始めた。専修学校への同時修学や、海外留学を可能にするまでに社会が豊かになり、いわゆる国際化が個人生活へも影響を及ぼし始めた。激しい生存競争にさ

らされた私立大学などでは姉妹校や海外校などでのアブロード・カリキュラムが新たに「制度」化され始めた。個々の学習者の能力の開発と養成をいかに効果的にするかシステムの原初の理念を求めて、語学教育の在りうべき姿の模索がはかられはじめたのである。もはや色褪せ始めたかに見える時代のキー・ワード「ベレストロイカ」が今度は我々の内なる壁を打ち破るのだろうか。
(1990. 3. 28)

「美」との出会い

中川益夫

本学の一般教育科目の中で、通常科目・総合科目、更には高学年一般科目を見渡しても、「美学」に相当する授業が開講されていないことに最近気付いた。筆者が三十年以上前に受けたのと同様の講義題目は、人文・社会・自然科学系列の中で、大抵見当たるのだが、美に関する講義が「芸術学」の中に含まれているにせよ、(未定)などの部分もあって、何か物足りない気がするのである。

筆者は、広義の「美学」は、以下に概述するように、自然・社会・人文にまたがる総合科目として、大変魅力に富んだ、しかも総合性のある学問領域だと考えている。そこで、ここに美の総合的探究の必要性についての私の小論を提示し、筆者の大学教養時代から今日に至るまでの「美」との出会いを振り返って、拙論の裏付けとすると同時に、本学における新しい総合科目「美」の探究一開設への打診とさせていた

だきたいと思うのである。

さて、「美」に関する理論を「美術」「芸術」に限定しないという前提のもとに論を進めたい。

まず思いつくのは、数学における美である。小学校で習う四則演算。いやそれ以前に、整数であれ有理数・無理数であれ、実数・虚数いずれであれ、数そのものが持つ魅力や美しさというものに、折にふれ感嘆してきた。また、幾何学では、初歩的なことしか知らないが、図形のもつ不思議さ、内に秘めている内的関連、場合によっては調和といったものを学び知った。ピタゴラスの定理などは二百通り以上の解法があるといふ一般教育で教えてもらったが、その定理にも、その解法にも、美しさというものが附随しているように思う。今はやりのフラクタルにも、美がある。従って、数学でいう「美」の概念は、絵画・音楽・彫刻でいう美とは、またちがった内容・定義で説明